



遠藤 謹助（えんどう きんすけ）

天保7年（1836）～明治26年（1893）



人物紹介

〈号〉 松雲

長州ファイブ（長州五傑）のひとりで、近代造幣の父といわれる。

天保7年（1836）、長州藩大組遠藤彦右衛門の次男として生まれる。文久3年（1863）年に伊藤俊輔（博文）らとイギリスに留学、イングランド銀行の紙幣印刷技術を目の当たりにする。慶応2年（1866）、帰国。同年、英國公使代理のキング提督が長州藩主父子（毛利敬親・定弘）と会見した際、井上馨とともに通訳を務める。

明治2年（1869）、大蔵省入省。翌年、井上馨の下で造幣権頭（副局長にあたる）となる。明治7年（1874）、大阪の造幣寮（のちの造幣局）首長のキンドルとの対立により造幣寮を去り、大蔵省大丞及び税関局長となる。明治14年（1881）造幣局に復帰、以後約11年間局長を務め、日本人による造幣技術確立を目指した。

明治26年（1893）9月12日病没。享年58歳。

造幣局局長時代の明治16年（1883）、造幣局構内の桜並木を市民に開放する「桜の通り抜け」を始めたことでも知られる。



資料紹介

県立図書館所蔵の遠藤謹助に関する本



生涯を簡単に紹介した本

※「Y280/N 7」などは、県立図書館の請求記号

- 『きらり山口人物伝 Vol.9』

夢チャレンジ出版事業刊行委員会制作 山口県ひとづくり財団 2016.9 Y280/N 7

遠藤の生涯をまとめ、小中学生向けに分かりやすい言葉で紹介している。読みづらい漢字はレビつき。年表あり。

- 『その後の長州五傑』松野浩二著 東洋図書出版 2011.9 Y215.8/P 1

遠藤ら、幕末にイギリスにわたった5人の留学生の生涯を紹介した本。第4章「造幣の父、遠藤謹助」(p145-168)に人物紹介あり。読みやすい。



長州ファイブについての本

- ・『明治の技術官僚 近代日本をつくった長州五傑』

柏原宏紀著 中央公論新社 2018.4 Y216/P 8

技術官僚としての長州ファイブの生涯をまとめた新書。第1章「2 留学と帰国の意味」(p37-52)、第3章「2 技術官僚遠藤謹助と造幣寮」(p108-119)、第6章「技術官僚として完結—遠藤謹助—」(p226-237) などに遠藤関連の記述あり。

- ・『長州ファイブ』ザメディアジョン 2006.11 Y215.8/N 6

図版を多く使って遠藤らの事績を紹介した本。「造幣の父 遠藤謹助」(p110-129)に人物紹介あり。明治7年（1874）大蔵大丞任命後、遠藤が大蔵卿大隈重信に提出した提言書の解説あり。

- ・『月刊・松下村塾 Vol.9 吉田松陰と伊藤博文』

月刊 松下村塾編集部編 山口産業 2005.6 Y289/Y 86/N 4

「幕末の密留学長州五傑」の章 (p10) で、遠藤の事績を1ページにまとめている。



その他の資料

- ・『造幣局百年史』正編・資料編

大蔵省造幣局編集 大蔵省造幣局 1974-1976 R337.24/K 4

正編p110-112に、桜の通り抜けについて記述あり。

資料編の人名索引 (p505) から遠藤関連の記述箇所をさがすことができる。p250-253に、明治7年（1874）に、遠藤が大隈重信に提出した提言書も掲載されている。

- ・「造幣局長遠藤謹助の履歴紹介—文久三年英國渡航五人組研究の一端として—」(井関清)

(「山口県地方史研究」48号 p65-73 山口県地方史学会 1982.11 Y205/I 4)

遠藤の生涯、特にイギリス留学時と造幣局での様子を、史料をもとに紹介した論文。

長州ファイブの英國渡航の経緯等のほかに、大蔵省に残る記録をもとに履歴を記載。

- ・『通り抜け その歩みと桜』

造幣局泉友会編 創元社 1996.4 627.7/M 6

p50-52に、桜の通り抜けの始まりについての記述あり。

山口県立図書館は明治維新資料の収集に努めています。

山口県立山口図書館 総合サービスグループ

T E L : 0 8 3 - 9 2 4 - 2 1 1 4 (調査・相談)

F A X : 0 8 3 - 9 3 2 - 2 8 1 7

ホーメージ : <http://library.pref.yamaguchi.lg.jp/>

このほかにも関連資料がありますので、詳しくはお問い合わせください。

作成日：令和2年（2020年）3月31日